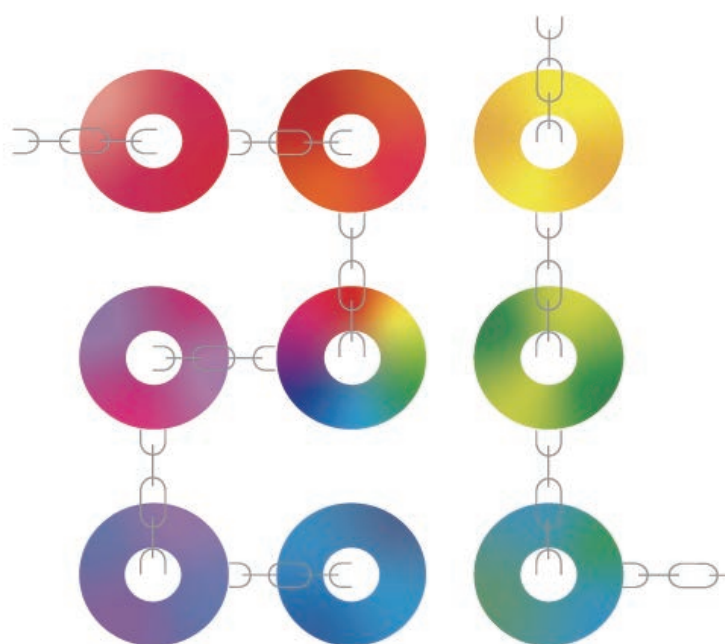


Japanese Association of Qualitative Psychology

# 日本質的心理学会

## 第21回大会

あむ、  
あまれる、  
あみなおす



日程

2024年

10/19<sub>土</sub>・20<sub>日</sub>

開催場所

成城大学 7号館

東京都世田谷区成城6-1-20 (小田急線 成城学園前駅 徒歩4分)

準備  
・  
実行委員長

青山征彦 (成城大学)

## 4. スケジュール

10/19 (土) 地下1階学生ラウンジ 711教室 721教室 722教室 723教室 731教室 732教室 733教室

830 受付開始

930	会員企画シンポジウム1 道具と身体 企画：飯田 奈美子	会員企画シンポジウム2 対人支援における支援者の 質的変容 企画：田代 順	ポスター (優秀賞選考セッション)	ポスター (一般発表セッション)
-----	-----------------------------------	--	----------------------	---------------------

1000

1030

1100

1130

1200

1230

1300

1330

1400

1430

1500

会員企画シンポジウム3 悩み方の作法 企画：角南 なおみ	会員企画シンポジウム4 TEA（複線経路等至性アプ ローチ）の可能性 企画：サトウ タツヤ	研究交流委員会企画 シンポジウム 未来に向けたナラティブ の力 企画：杉山 高志・安齋 聡 子・佐藤 由紀・杉浦 彰子	会員企画シンポジウム5 質的研究をあみなおす 企画：楠見 友輔	会員企画シンポジウム6 アートベース・リサーチ が拓く質的研究の可能性 企画：青山 征彦
------------------------------------	--	--	---------------------------------------	---

会員企画シンポジウム7 AIが質的研究をどう変えて いくか 企画：薛 海升	常任理事会企画 シンポジウム 日韓若手研究者による 質的研究の展開 企画：伊藤 哲司	招待講演 アートベース・リサーチ とソーシャルフィクショ ンのパワーと可能性 ハトリシア・リーヴィー
--	--	--

1530 1600 1630 1700 1730 懇親会受付開始 (17:45)

1800 懇親会

1900

10/20 (日)

地下1階学生ラウンジ 711教室 721教室 722教室 723教室 731教室 732教室 733教室

830 受付開始

930	会員企画シンポジウム8 権経登路等至性アブローチ における分岐点の捉え方 企画：上川 多恵子		会員企画シンポジウム9 ビジュアル・ナラティブと メタファーの力 企画：横山 草介・やまだ ようこ	ポスター (優秀賞選考セッション)	会員企画シンポジウム10 記号論的文化的心理学の理論 的展開の議論 企画：清田 明暢・宮下 太 陽・土元 哲平 総会 (11:45~12:45)	ポスター (一般発表セッション)
1000						
1030						
1100						
1130						
1200						
1230						
1300	講習会 ヴァルシナー先生との対話 講師：ヤーン・ヴァルシ ナー	会員企画シンポジウム11 ASD・NT間の共生的な規 範的行為形成を目指す支援 企画：山本 登志哉	会員企画シンポジウム12 「ゲームをつくること」に よる関係性のあみなおし 企画：石田 善美	質的心理学研究編集委員会 企画シンポジウム 『コンフリクト』と向き合 う 企画：上手 由香・綾城 初 穂	質的心理学フォーラム編集委員 会企画シンポジウム 研究者の偶然性と当事者性 企画：北尾 尚大・町田 奈緒士・ 松浦 李恵・郡司 菜津美	
1330						
1400						
1430						
1500						
1530	会員企画シンポジウム13 言説分析と社会的課題	会員企画シンポジウム14 アロマセラピー実践の可能性 企画：川野 健治・ハッ塚 一郎・岡部 大祐	会員企画シンポジウム15 メディア芸術作品のマルチ モーダル投射論 企画：阿部 廣二	会員企画シンポジウム16 「土地の力」を感じる 企画：村本 邦子・伊藤 哲 司	会員企画シンポジウム17 特別支援教育を「あみなお す」ための方法論 企画：海老田 大五朗	
1600						
1630						
1700						
1730						

## 【会員企画シンポジウム】

会員企画シンポジウム 1	10月19日(土)	09:30-11:30	721 教室
--------------	-----------	-------------	--------

### 道具と身体 —プラクティスの構造化の考察の精緻化—

企画： 飯田奈美子（立命館大学衣笠総合研究機構）

会員企画シンポジウム 2	10月19日(土)	09:30-11:30	722 教室
--------------	-----------	-------------	--------

### 対人支援における支援者の質的変容 —ナラティブ・アプローチの導入で支援者と臨床現場はいかに変容したか—

企画： 田代 順（ナラティブ・アプローチ研究室）

会員企画シンポジウム 3	10月19日(土)	13:00-15:00	711 教室
--------------	-----------	-------------	--------

### 悩み方の作法 —日常体験に対する臨床的アプローチの学際的模索—

企画： 角南なおみ（帝京大学文学部）

会員企画シンポジウム 4	10月19日(土)	13:00-15:00	721 教室
--------------	-----------	-------------	--------

### TEA（複線径路等至性アプローチ）の可能性 —移境態・関係学・個体化・ナノエスノグラフィー—

企画： サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

会員企画シンポジウム 5	10月19日(土)	13:00-15:00	723 教室
--------------	-----------	-------------	--------

### 質的研究をあみなおす —『アンラーニング質的研究』の回折的読み—

企画： 楠見友輔（信州大学）

## 質的研究をあみなおす

— 『アンラーニング質的研究』の回折的読み—

企画・司会： 楠見友輔（信州大学）

話題提供： 緒方亜文（東京大学大学院）

話題提供： 小田郁予（早稲田大学）

話題提供： 久保田裕斗（びわこ学院大学）

### 企画趣旨

企画者は、『アンラーニング質的研究：表象の危機と生成変化』（楠見，2024）を出版した。本書では、表象の危機後の質的研究の動向と、近年のドゥルーズの哲学、ポストヒューマニズム、ニューマテリアリズムという現代思想の質的研究への影響を説明した。また、「慣習的な人間中心主義的な質的方法論からの転回」（St. Pierre, 2019: 3）という運動が、どのような問題系の中で生じているのかを議論した。そこで取り上げたテーマは、「表象の危機を経て質的研究者がポストモダニズムを受容したこと、監査文化に対する多くの研究者の抵抗、関係的倫理とサバルタンへの配慮、人新世における問題系、科学における認識論と存在論の新たな転回」（楠見，前掲書：186）である。

本書のタイトルに含まれる「アンラーニング」は、読み手が質的研究の型をほぐすことと、学会の中で蓄積されている型をほぐすことの両方を含意している（楠見，前掲書：12）。このことを踏まえると、日本質的心理学会という質的研究に関心のある研究者が集まる学会において本書を検討することは、アンラーニングを通して社会科学研究の未来をひらくことに貢献できると考える。

若手研究者である3名の登壇者は、本書で記されたテーマのうち、1つないし複数の章で示されたテーマについての話題提供を行う。その際に期待するのは、「本書と一緒に考える」という「回折的読み」（Barad, 2007; Hultman & Lenz Taguchi, 2010）である。回折的読みとは本書から学ぶことでも、本書を通して既知の考えを深めることでもない。それは、本と読み手の重なり合いから新しい知識を生み出すことである。

本シンポジウムでは、参加者からの自由なコメントや意見を期待することから、指定討論者を立てない。シンポジウムの語源である「シンポジオン（共に飲む）」とは、食事や飲み物を愉しみながら議論を自由に行う場である。本企画は、そのような場を提供することで、参加者にとっての新しい質的研究のアイデアを持ち寄り、それらを「あみなおす（reassemlage）」ことを試みる。

### 話題提供1：ディスコース分析・会話分析を活用することは可能か（緒方亜文）

話題提供者は、博士課程に在籍する研究者である。これまで、自閉スペクトラム症（以下、

ASD) の子どものコミュニケーションに関心を持ち、中学校の特別支援学級におけるフィールドワークを行ってきた。具体的には、ASD の子どもへのインタビューや、教師・支援員・周囲の子どもなどのやり取りの観察を行ってきた。その分析の際に用いている方法に、ディスコース分析や会話分析がある。これらは、社会構成主義に基づく分析のツールと見なされている (Burr, 2015/2018)。翻って、本書で提示されている回折的な読み、ポスト質的研究といった視点から、ディスコース分析や会話分析をいかに用いることができるのか。あるいはそもそも用いることが可能なのか。いくつかの具体的な事例やデータに基づいて、議論を行いたい。

## 話題提供 2 : 監査文化と向き合う : 教師研究の前提を問い直す (小田郁予)

報告者の専門は教師研究である。多様な課題に直面しながら学校がなぜ機能破綻しないのかに関心を持ち、その背後で機能している教員文化の特徴を継続的な観察と教師の語りの分析から検討している。本報告では、現職経験を有する若手研究者として、教師研究を巡る課題について話題提供し、参加者と共に「アンラーニング」していきたい。

議論の契機となるものとして、報告者からは教師教育研究で展開されている議論の概観を示し、研究者が教師の道具化に寄与し、教師の脱専門職化に意図せず加担している危険性があることを示す。その上で、楠見 (2024) が危惧する「監査文化」について、1) 監査文化が学術研究や教師の実践にいかなる影響を及ぼしているか、2) 監査文化の浸食を阻止するために研究者/実践家は何をし得る/すべきか、参加者と議論していきたい。

## 話題提供 3 : アンラーニング障害学 (久保田裕斗)

話題提供者はインクルーシブ教育や特別支援教育に関心を持ち、その実践を主に教育社会学的な観点から検討してきた。インクルーシブ教育を既存の学校秩序の変革のプロセスであると考えられる場合、重要になるのは個人化 (身体化) された問題を社会化し返すことであり、その際に障害学の蓄積を無視することはできない。

すでに日本の障害学においては、ディスアビリティ/インペアメントの二項対立的前提を批判的に検討した研究や、障害以外の観点も含めてジェンダー・セクシャリティ、移民等との交差性を論じた研究など、既存の障害学が立脚してきた枠組みを批判的に検討する「批判的障害学」と称される新しい研究動向が存在する。当日は、こうした障害学の動きを、本書でも言及されていた「(新しい) マテリアルターン」という観点をもとにアンラーニングする話題を提供してみたい。

## Reassembling Qualitative Research

Reading “Unlearning Qualitative Research” Diffractively

KUSUMI, Yusuke (Shinshu University), Organizer & Moderator

OGATA, Amon (Graduate School, The University of Tokyo), Presenting Author

ODA, Ikuyo (Waseda University), Presenting Author

KUBOTA, Hiroto (Biwako-Gakuin University), Presenting Author

Language: Japanese